

もくじ 千柳館のあゆみと千住の思い出 1p 手記 爆弾が落ちた日2 2p 足立の水道覚書 下 3p
 じ ここで見て足立の博物館資料 4p 絵本で語る「ぼくたちのおばけえんとつ」 4p

足立史談

第567号

2015年5月15日

足立区教育委員会

足立史談編集局

足立区立郷土博物館内

〒120-0001

東京都足立区大谷田5-20-1

TEL 03-3620-9393

FAX 03-5697-6562

(27-308)



千柳館の客間にて柳下博氏（明治35年生）と家族 昭和12年正月の撮影
 前列は母と祖母に抱かれている静子氏

まちの写真館2 千柳館 千柳館のあゆみと千住の思い出 1 柳下静子

「史談」556号の「まちの写真館」の記事に「千柳館」（せんりゅうかん）の文字を見つけ、さらに冒頭に掲載されているのは紛れもなく我が祖父母、親戚と思われる面々が正

「史談」556号の「まちの写真館」の記事に「千柳館」（せんりゅうかん）の文字を見つけ、さらに冒頭に掲載されているのは紛れもなく我が祖父母、親戚と思われる面々が正

【解説】「史談」五五六号「まちの写真館」柳下写真館の歴史」掲載後、千住仲町で開業した千柳館柳下邦三氏の息子博氏の娘、柳下静子氏より手記をお寄せいただいた。

邦三氏の弟栄之助氏が独立して柳下写真館を開業してのち、千柳館の家族は、昭和二〇年三月に強制疎開のため、千柳館で修行して独立していた草加の横田写真館へ転居した。柳下写真館は、戦後すぐ二一年に疎開先から戻ったが、千柳館の家族が戻ったのは昭和三〇年で、千住仲町で昭和四八年まで開業していた。写真館の娘として昭和十一年に生まれた静子氏による千柳館のあゆみと当時の千住の様子を紹介する。（郷土博物館）

装している「千柳館」の昔の写真、思わず目を疑った。これまで「千柳館」という少々大時代がかった屋号はそれ程自慢にもならず、あの戦災で失い戦後は一応小さな店で復活はしたがもう止めて久しい。だが年を重ね徐々に千住びいきが目覚め、忘れたわけではない、私の中にずっと仕舞い込んでいた「千柳館」への想いが徐々に動き出してきたのかも知れない。

原戸籍によると明治三十八年五月に祖父邦三は、東京府南足立郡千住町大字千住仲組七拾九番地に居を構えている。弟の栄之助と力を合わせてまだ千住では珍しかった写真館を開いた。千住の「千」と苗字の「柳」を合わせて「千柳館」と命名し、明治、大正、昭和と続いた千住界隈草分けの写真館。



千柳館の文字が見える写真。最も古く撮影されたもののひとつ。（明治38年3月）

私の父、博の戸籍によれば、柳下邦三は明治十四年横浜に生まれ、同じく横浜生まれのワカとの間に一子、博を儲ける(明治三十五年)。後々の博の昔ばなしによれば「下男」の墓まで屋敷内にあった大きな造り酒屋」だったとか。新しい時代、明治になってその大きな新しい流れに飲み込まれ破産、一家離散の状況に陥り、当然兄弟たちはそれぞれ生きる道を求めざるを得なかった。早くから外国人の往来が多く、明治二十年代の横浜には既に数十の写真館があり、外国人を含め写真師が多数いて職業として成立していたらしい。邦三は将来性あり、魅力ある職業として写真師の道を選び、いずれかの写真館へ早くも十代の半ばにして弟子入りしていたのではないかと推測する。

その後、三男であろう邦三は異母兄弟の弟、栄之助(戸籍には五男、明治十七年生)を誘い、二人で開いた「千柳館」は、明治、大正と順調だったと聞くが、大正十一年、兄の邦三は四十一歳の若さで亡くなる。長男博が修業行先より戻り「千柳館」を継ぎ、栄之助は分家して千住一丁目に「柳下写真館」を開き、現在も三代目の柳下勉氏が立派なスタジオを構え順調に営業を続けている。

兄の邦三は早世してしまうが、弟栄之助は健在で昭和三十一年、二年頃

は既に隠居の身。時折我が家を訪ね昔ばなしのお相手を務める甥である私の父博は「チャーチャ」と呼び敬愛していた。「チャーチャ」とはロシア語で「おじさん」という意味とか。その「チャーチャ」は当時あまり見かけぬ毛皮か起毛かのロシア人風の帽子をいつも被っていたのでそのわけを尋ねると、昔、父邦三と叔父栄之助はロシアに渡ったことがある、ただし「外国に修業に行ったなどという結構なはなしではなく、いまでいう稼ごのようなもの・・・」と語ったのを覚えている。

ロシアと言ってもはるか彼方の古都サンクトペテルブルクなどではない。明治以前から大陸に渡るのに敦賀からウラジオストクへの船便が開けていたという。邦三、栄之助兄弟は、はるばる極寒の地シベリアに夢を托し、開業資金を得るため彼の地で渾身の力をふりしほり働いたのではないか。

当時、ウラジオストクは港湾都市としてロシア帝国の軍事基地であった。早くも明治初年には日本政府の貿易事務館(後に領事館となる)も建ち、ロシア人を始め中国人、朝鮮人に混じり、かなりの日本人が暮らして極東の経済文化の中心地であったハバロフスクへはいち早く鉄道(ウスリー線)が通じ、シベリア鉄道の基礎となった。(ロシアを知る

事典参考)

こうした多民族が集まりめまぐるしく動く都市で、二十代の兄弟は稼ぎ、写真の機材なども求めてきたかも知れない。いくばくかの開業資金を入手し、まだ新開地だった千住で明治四十年前後に開業し、地盤を固めていったのではないかと思ひ巡らしてしまふ。

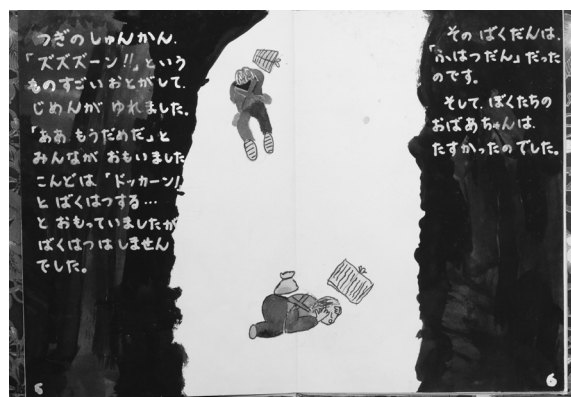
(つづく)

手記 爆弾が落ちた日(第2回)

井上 きみ子 著

対戦国の本土の空襲は、日を追って激しさを増し、昼となく夜となく繰り返されていました。私達の職場での日課を云えば、出勤するなり重

要書類と書かれた柳行李の紐を解く事から始まり、空襲のサイレンが鳴るや直ちに元に戻し、避難すると云う繰り返し。半日は壕の中と云う有様でした。事務所の前に鉄筋コンクリート四階建の建物が有り、一階の床部分は無数の深い槽が出来て居り(それは軍用のハイノウ、靴になる原皮を薬液に漬け込む前の槽)、それが私達の格好の防空壕となっていました。そんな中で、長く暗い、この戦争の行方を考え、一日も早く勝利の終戦を迎えたいと念じていました。数日前には、この上空で空中戦があり、日の丸を付けた戦闘機が火を噴いて落ち、工場のそばを流れる隅田川に突っ込んだのでした。私達のいる建物をさける為に、最後の力を振りしほって操縦桿を切ってくれた



井上氏のお孫さんが制作した絵本「ふはつだんがおちた日」より 上:5~6頁、下:7~8頁

のでしよう。後で警備の人が現場に行き、その飛行兵の細かく飛び散った肉片のいくつかを掌に乗せて来て見せてくれました。淡いピンクの綺麗な色でした。

爆弾の落ちた日は、警戒警報に引き続き、すぐ空襲警報が発令され間近に爆音が聞こえる状態でした。柳行李を先頭に四、五人の仲間の人達と慌てて壕に飛び込みました。

敵機奇襲を知らせるメガホンの声と共に、いきなり爆音が聞こえ、緊迫感がみなぎりました。「あ、爆弾、落ちだぞ。こっちに来る。伏せろ。」殺気立った声にカバツと床に伏せました。いつも訓練している様に親指で耳をふさぎ、残った指で目をギュッと抑え、口を開く(爆風に備える為)スタイルです。緊迫した一瞬にいろいろなことが頭を駆けめぐりました。爆発した時は一体どんな衝撃を受けるのだろうか。目が飛び出してしまうのか、それとも体ごと吹き飛ばされるのか。不意にこの間見た飛行兵の細かい肉片を思い出しました。やがて爆弾が地上に突入した様な衝撃を感じ、次に来る恐怖の瞬間を待ちました。何秒かが経ち、ふと我に返ってそつと顔を上げました。何が起ったのか解らぬままに、皆キョトンとした目を合わせました。「不発弾だ、不発弾だゾー」その声でやっと皆助かったのだと実感

したのです。被弾したところとは、一〇mと離れていなかった様で、今考えてもゾツとします。

(つづく)

足立の水道覚書 下

萩原 ちとせ

小規模水道は、水道法の適用外なもので、井戸、河川、ゆう水(湧き水)などの自己水源を用いるもので、居住者五〇人以上、百人以下に供給するものを小規模専用水道という。

水道事業者(東京都水道局)による供給を受けないものであるが、使用方法は、一般の水道と同じように、蛇口をひねると水が出る。

花畑地域では、水道局による水道供給が開始したのは遅かった。水道管の施設が、区画整理の進捗に従って行われたためである。それ以前は、井戸水を揚水し、その水を周辺の数軒に配水する形で、「水道」を使用していた。これを「簡易水道」とよんでいることもあるが、厳密には小規模専用水道に当たるものであると考えられる。

を溜めるタンクが設置されていたという。ただし、集落全軒がこの方法で配水を受けるようになっていたのではなく、従来どおり自家の井戸を使用する家もあったという。

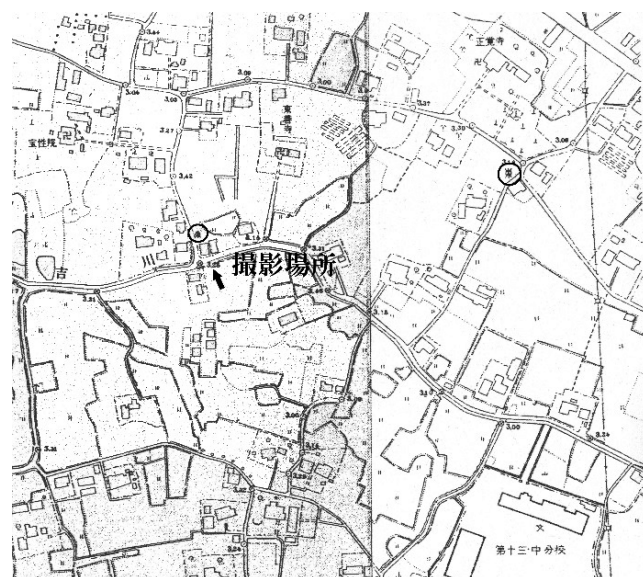
自家の井戸の場合は、手押しポンプによる揚水のため、蛇口をひねって水を出すわけにはいかず、井戸から使用場所までくみ上げた水を運ぶ必要がある。井戸はたいいてい屋外に作られていたため、水汲みや水運びは重労働であった。

花畑仲組集落在住の鈴木恒雄氏によると、集落の各所に井戸からの揚水

この、タンクによる配水は、非常に便利な方法であった。自家井戸より離れた家々への配水のため、深井戸で揚水もモーターを用いたものであると考えられる。小規模専用水道であつても、



【写真1】昭和38年11月 遠山商店(花畑町817)の屋根越しに見えるタンクが小規模専用水道のタンク。



【写真2】花畑水道地図 掲載

多数の人々が使用するため管理や消毒など衛生を保つために、基準が設けられている。しかし、鈴木氏によると、都心の水道水とは明らかに味が異なり、消毒などいかなかったのではという

印象があるという。

【写真2】の地図は、【写真1】と同じ昭和三八年ころの花畑の地図で、この地図には水道タンクが示されている。○をつけたものがその印である。

この北側に花畑団地の建設と区画整理が進んでおり、昭和四〇代前半になると道路整備とともに本水道の使用が可能となったと考えられる。タンク式の小規模専用水道による配水は、モーター動力の使用が可能になった時代から、水道管の施設が行われるまでの比較的短い期間であったと考えられる。また、自家井戸から直接、本水道の使用へと変化した家もあるであろう。こうした水道施設の運営方法、給水範囲など詳しい資料を探し、生活の変化のなかで水の確保について今後も調査していきたい。

(当館学芸員)

足立の博物館資料

郷土博物館の資料は、しばしば他の美術館・博物館と研究・資料情報の交流を経て、展覧会に出品されます。今号から展覧会観覧の参考にしたいだけでなく、足立の資料について学ぶ機会を紹介することを目的に、セレクトして随時ご紹介いたします。

常信筆百獣図

―武蔵野美術大学美術館・図書館―

5月25日(月)～8月16日(日)

に開催される武蔵野美大美術館・図書館(小平市小川町)の「絵の始まり 絵の終わり―下絵と本画の物語り―」展に当館蔵(石出家寄贈)の「常信筆百獣図」が展示されます(右写真)。幕末千住宿の惣代をつとめた石出家には木挽町狩野派とも付き合いがあったと伝えられ、狩野派の粉本や模本が伝来しています。本資料もその一つです。多くの動物たちが描かれた百獣図の一つです。展覧会では「狩野元信伝原作猊屏風」(東京藝術大学美術館蔵)等とともに展示されます。



「常信筆百獣図」より「猿猴」

【お問合せ】武蔵野美術大学美術館・図書館(電話〇四二・三四二・六〇〇三)

阿弥陀三尊図像板碑

―長野市立博物館―

今年、七年に一度のご開帳を迎えている長野の善光寺ですが、これを記念して5月31日(日)まで長野市立博物館(長野市小島田町)で「信仰のみち 善光寺・戸隠・飯縄・小菅・斑尾・妙高」展が開催され、当館蔵「阿弥陀三尊図像板碑」(天文二・一五三三年銘)が展示されています。

碑文に「善光」の文言が記され、次に「寺」と読める可能性がある文字が有ることから、戦国期の江戸周辺に善光寺信仰が広がっていた希少例として出展されています。

【お問合せ】長野市立博物館(電話〇二六・二八四・九〇一一)

絵本で語る

『ほくたちのおばけえんとつ』

大正一五年から昭和三九年まで、千住桜木町に聳え立っていたお化け煙突。煙突解体から五〇年以上が経った今でも、多くの人々の記憶に残り、語り継がれています。

そんなお化け煙突が絵本となってよみがえりました。『ほくたちのお

ばけえんとつ』は、NPO法人「千住文化普及会」が制作し、児童文学作家の岩崎京子氏と手づくり絵本ネットワーク青木珠代氏が内容を担当、絵は当時都立足立新田高等学校の三年生だった中尾里穂さんが作製しました。

絵本は、三人の男の子たちが電車に乗ってお化け煙突まで冒険に行くというストーリーで、ほのぼのとした風景の中にも、町のみんなにとって大きな存在だったお化け煙突の姿を伝えています。

『ほくたちのおばけえんとつ』

B五判・二四ページ
一一八〇円(税込)

【お問合せ】千住文化普及会

(電話〇三一三八八一―三三三三)



完成した絵本を手に、櫛原さん(右)と中尾さん(左)。